水曜通信45 最終号

2025年
2月

東北学院宗教センター編

第80回 水曜公開礼拝
2025年２月19日（水） 18：30－19：00

＜礼拝次第＞

前　奏：H.シャイデマン作曲
「主キリスト、神のひとり子」

讃美歌：讃美歌21　222番「キリストよ、光の主よ」

聖　書：ルカによる福音書 7章36－50節

讃美歌：讃美歌21　459番「飼い主わが主よ」

説　教：「見えない希望、見える輝き」

頌　栄：讃美歌21　25番「父・子・聖霊に」

後　奏：J.S.バッハ作曲
「主キリスト、神のひとり子」BWV601

説教
東北学院宗教センター
主事
阿部　頌栄

奏楽・第２部演奏
礼拝オルガニスト
渡辺　真理

後奏の後、渡辺真理氏（礼拝オルガニスト）によるオルガン演奏による賛美を行います。

次回第81回水曜公開礼拝は４月16日です。

第79回 水曜公開礼拝報告（説教：西間木 順、奏楽：菅原 淑子）

2025年１月15日（水）　18：30－19：00

讃美歌：39番「ひくれてよもはくらく」
聖　書：ヨハネによる福音書８章31－38節
讃美歌：121番「まぶねのなかに」
説　教：「この人を見よ」
頌　栄：539番「あめつちこぞりて」

【説教要旨】

「あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする」と主イエスは教えてくださいました。私たちを自由にする真理とは、主イエスのことです。主イエスの十字架で示された神の御心です。その真理を知るために、私たちは主イエスの言葉を聞き続けなければなりません。主イエスの言葉にとどまらなければなりません。主イエスの言葉を聞き、主イエスの言葉にとどまることによって、私たちは神がどれほど私たちを愛してくださっているか知ることができるのです。そして私たちは、十字架につけられた主イエスを仰ぎ見ながら、その主イエスと共に、神の道を自由に歩いていくのです。

（東北学院榴ケ岡高等学校宗教主任　西間木 順）

前　奏：ディートリヒ・ブクステフーデ作曲「われは神より離れまじ」BuxWV220

ディートリヒ・ブクステフーデ（Dietrich Buxtehude）は、北ドイツ・バロック音楽を代表する作曲家として知られています。

この作品は、ルター派のコラール「われは神より離れまじ」に基づいています。

堅固な信仰を象徴する旋律に、豊かな装飾と精緻な対位法が施され、祈りに満ちた静けさと崇高さを感じさせます。自由な形式と即興的な要素が、神への深い信頼を美しく描き出しています。

後　奏：ディートリヒ・ブクステフーデ作曲「われは神より離れまじ」BuxWV221

同じコラールに基づくBuxWV221は、異なるアプローチで編曲され、旋律の扱いに新たな工夫が見られます。荘重さに加え、躍動感や祝祭的な雰囲気が特徴的で、音楽にさらなる深みを与えています。

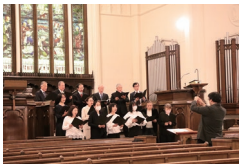
これら２つの作品は、同じコラールを異なる視点から表現しています。前奏としてのBuxWV220は静謐で敬虔な祈りを、後奏としてのBuxWV221は高揚感と力強い印象を残す対照的な作品です。

（オルガニスト　菅原 淑子）

礼拝とその後19時から19時30分までの菅原淑子氏によるオルガンによる賛美に48名の方が参加されました。

礼拝後、音楽による賛美（オルガン演奏：菅原 淑子）

１．讃美歌21 469番〈善き力にわれかこまれ〉
　　［教職員聖歌隊による賛美］
２．シャルル＝マリー・ジャン・オベール・ヴィドール作曲
　　オルガン交響曲 No.5 ヘ短調 作品42－１
　　Ⅰ. Allegro vivace
　　Ⅱ. Allegro cantabile
３．讃美歌第二編152番〈古いものはみな〉［教職員聖歌隊による賛美］



シャルル＝マリー・ヴィドール（1844－1937）は、フランス・ロマン派を代表するオルガニストであり、オルガン交響曲の形式を確立した作曲家です。

彼の「オルガン交響曲 第５番 ヘ短調 作品42－１」は、その代表作として知られています。第１楽章「Allegro vivace」は、フーガ的な構造と力強い響きが特徴で、オルガンをオーケストラのように扱った壮大な楽章です。一方、第２楽章「Allegro cantabile」は、一転して優美で抒情的な旋律が展開され、詩情あふれる音楽が印象的です。

この交響曲は、壮麗さと抒情美を兼ね備えたオルガン音楽の名作として広く親しまれています。

（菅原淑子）

― 建築が語る東北学院の歴史（最終回）―

始まりがあれば、終わりがあります。前身のコラムを含め５年半で48回に渡って担当させていただいた連載も、本号をもって最終回を迎えることになりました。建築史などという脇道を専門とする筆者が、読者の皆様の興味をひくコラムをお届けできたかどうかを振り返りますと反省するばかりですが、拙文の中に皆様の知的好奇心に届く一節が僅かでもありましたならば、これ以上の喜びはありません。

建築はしばしば『記憶の器』と呼ばれ、ときに『時代を映す鏡』とも形容されます。この、モノの持つ喚起力こそが建築の偉大な力です。幸いなことに、東北学院が有する歴史的建築群には、そうした力が漲っています。連載が始まったときに４棟だった構内の文化財建造物には更に１基（正門）が加わり、六軒丁通りを飾る変わらない景観は、より強固なものとなりました。2025年は昭和100年。それは丁度、土樋キャンパスの最初の建築である本館（旧専門部校舎）と正門が出来てから100年の節目でもあります。

土樋キャンパスでは、現在、先人たちの営みの上に未来を開くための校地整備が進められています。キャンパスの西端に在り、かつて「シップル館」の名で親しまれた重要文化財「東北学院旧宣教師館（デフォレスト館）」においては、保存整備に向けた調査工事と保存活用計画策定への動きが加速しています。2024年には周囲の老朽化した建物が解体され、風景も一変しました。工事の竣工まではもう少し時間を要しますが、いずれ皆様には、新しい歴史的景観をお見せできるものと思います。

始まりがあれば、終わりがあります。と申しましたが、東北学院の歴史は未来へと続いていきます。読者の皆様にはぜひ、東北学院のキャンパスの今後にも注目していただけたら幸いです。（完）

（工学部　﨑山 俊雄）

図１：礼拝堂竣工後（昭和初期）のキャンパス景観
（ランカスター神学校蔵）

図２：2024年12月26日の土樋キャンパス西側の景観
（﨑山撮影。中央奥に見えるのはデフォレスト館）

「水曜通信」の廃刊に寄せて

文部科学省私立大学研究ブランディング事業による本学「東北における神学・人文学の研究拠点の整備事業」から始まった「水曜通信」の発行であるが、本号をもって廃刊となる。ブランディング事業として2017年４月より2020年３月までの30号、2020年４月より同年９月までのコロナ禍による中断を挟んで、宗教センターの刊行事業として新たに45号を刊行し、８年間で合計75号を刊行してきた。この間、同時並行的に開催してきた水曜公開礼拝の説教と宗教音楽についての解説、東北学院史や建築の歴史、美術や史料の紹介などを掲載してきた。しかし、「水曜通信」を牽引してきた鐸木道剛教授の召天、野村信宗教センター主任・チャプレンの退職に伴い、存続が危ぶまれてきたことも事実である。「水曜通信」は廃刊するが、水曜公開礼拝は宗教センターによって存続され、その他のテーマは、宗教音楽研究所、史資料センターに引き継がれていくことを報告し、廃刊の辞としたい。

（宗教センター所長　大西 晴樹）

最後の「編集後記」として

ブランディング事業の一環として始まった夜間の「水曜礼拝」はラーハウザー記念東北学院礼拝堂での礼拝の公開と動画発信の活動でした。その名称に呼応して「水曜通信」は、コラムと画像をとおしてブランディング事業の進捗状況を報告し、発信する役目を担ってきました。当初予定よりも早く2020年度にブランディング事業の支援が切り上げられると、その事業は同年に発足した宗教センターに移管され、「水曜通信」も継続してきました。しかしながら、特に近年のDX化や物価高騰も相まって、紙媒体としての「水曜通信」の刊行について協議し、当初の役目は十分に果たせたと判断し、廃刊を決断しました。宗教センターによる最新のキリスト教活動の報告は昨年度からインターネットをとおして積極的に発信しています。今後、そちらが活動報告の発信媒体の基軸になります。今後とも引き続き、宗教センターの活動にご関心頂き、センターの刊行物等に掲載しているQRコードを読み取り、SNSにアクセスしていただけましたら幸甚です。

（宗教センター主任　原田 浩司）

東北学院宗教センター編「水曜通信」第45号
2025年２月５日発行
発行責任者：宗教センター主任　原田 浩司
東北学院宗教センター　TEL：022-354-8310
〒984-8588　仙台市若林区清水小路３-１
Email：c.center@mail.tohoku-gakuin.ac.jp

宗教センターHP